

紅山文化と中国北方文明の起源について

徐 子 峰

摘要

黄河流域は中華文明の揺籃の地であり、中華文明発祥の中心である。この理論は、考古学研究の発展と深化に伴い、特に1970年代以降全国各地で新しい発見が次々と世に問われるにつれて、「満天の星」説という重大な挑戦に直面した。

研究によると、中華文明の発生と形成は主に三つの地域に端を発するとされている。それは南方の長江流域、中原の黄河地域、北方の遼河流域である。そして北方の紅山文化が有する豊富な内容と独特な文化の様相は、西遼河流域が中華民族の重要な発祥地の一つであり、また、中国北方文明の重要な源であることを有力に証明している。

紅山文化が新石器時代、特に中華文明の起源における重要な地位を確立したのは2回の転機があったからである。その1つは紅山文化の玉器確認の研究であり、もう1つは紅山文化の壇と廟と塚の発見である。

紅山文化の後期に出現した東山嘴祭壇と牛河梁女神廟、積石墓の巨大な「ピラミッド式」建築は、紅山文化と中国文明の起源に関する新しい内容を加えた。また、紅山文化が中華文明の起源と密接に関係した中国北方文化として重要であることが判明した。

紅山文化の成熟した玉器の組み合わせと玉器の文化群、紅山文化の壇、廟、塚が示すのは、巨大な社会機能と厳密に組織された管理秩序と文化レベルであり、紅山文化がすでに文明時代へと接近していたことを確信させる。

紅山大地の文明の光はまさに、神権と族権とが結合した独特の方式をとって太古の西遼河流域に出現したのである。

1. 中華文明の起源問題

中華文明の起源問題は近年の学界が注目するホットな話題の一つで、学者たちは歴史学や考古学、人類学、民俗学といった各方面から着目し、中華文明の起源と形成過程について幾度となく検討を試みてきた。そして、そこから歴史的現実の過程を復元する糸口を探ってきた。しかし、歴史上かなり長い期間、中華文明の起源問題は一元論によって独占されてきた。歴史学界のみならず、考古学界においても、黄河流域が中華文明の揺籃の地であり、中華文明の起源の中心であると伝統的に認識されてきたのである。

このような理論が支持されるなか、わが国960万km²の範囲の中では、黄河流域以外の周

辺地域の文化は、すべて黄河流域文化の影響によって発生したか、あるいは発展してきたと考えられてきた。しかし、考古学研究の発展と深化が進むにつれて、特に1970年代以降の全国各地における新しい考古学的発見は、中華文明の起源が多元一体的構造をなしているとする客観的事実を証明し、黄河搖籃説は「満天の星」説の重要な挑戦に直面するようになった。

そして紅山文化は、中国北方と長城地帯の重要な新石器時代の文化として、また、こうした理論の背景として、もっとも重要視されたのである。特に紅山文化の壇、廟、塚の発見は、紅山文化の内容が豊かであったことを明らかにし、紅山文化が展開する燕山南北と長城地帯が同様に中華文明の重要な発祥地の一つであることを証明するものとなった。

それでは、紅山文化とは、どのような文化であるのか。北は西拉沐淪河流域、南は渤海海岸、西は華北北部、東は遼寧西部まで分布するこの新石器時代文化は、これまでほとんど知られることがなかったが、今日、次第に認識されるようになってきた。紅山文化と遼河文明の起源はまた、野外考古学の調査の進展によって、その趨勢と発展の脈絡が日増しに明らかになってきている。



写真1. 紅山文化を育んだシラムレン河の風景

2. 紅山文化の発見とその意義

紅山文化の遺物が最も早く発見されたのは1935年である。1954年には著名な考古学者、尹達先生によって正式に「紅山文化」と命名された。彩陶と打製石器、磨製石器、細石器が共存した新石器時代文化が長城以北から発見されたことは、国内外の学者の注目を集めた。新中国成立以降、紅山文化の分布範囲や内容、年代および特徴などについて多くの研究が行われてきたが、その文化の性質と来源については考古学界でも意見が一致していなかった。

1940年代には「混合文化」とも呼ばれ、1960年代以降は、ある学者が仰韶文化と河北磁山文化の影響を受けたものであると強調した。実際、紅山文化の性格と内容について、ある考古学者は次のように説いた。

「中国古代文化には二つの重要な区系がある。一つは謂河流域を源とする仰韶文化、もう一つは大凌河流域を源とする紅山文化である。これらはともにそれぞれのルーツとシンボルを持つ。両者が出現し、形成された時期は今から約6000年から7000年前である。また、ともにそれぞれの祖先から派生、あるいは分裂したものであり、仰韶文化のシンボルはバラ（ハマナス）、一方の紅山文化のシンボルは龍である」⁽¹⁾。

つまり紅山文化には南北の文化が結合した特徴があり、鋤を代表とする発達した石器群は学者の注目を集め、紅山文化はさらにしっかりとした歴史的文化的背景を持つものとして認識されてきた。また、紅山文化は新石器時代、特に中華文明の起源において重要な地位を占めるようになった。それには2回の転機を経ている。1つは紅山文化の玉器の確認とそれに関する一層進んだ研究であり、もう1つは紅山文化の壇と廟と塚の発見である。

紅山文化のルーツと性格について、今日、以下の観点から論じられている。

1. 紅山文化は、仰韶文化系統の原始文化であるか、もしくは仰韶文化の地方的バリエーションである。
2. 紅山文化は、河北の磁山文化を継承

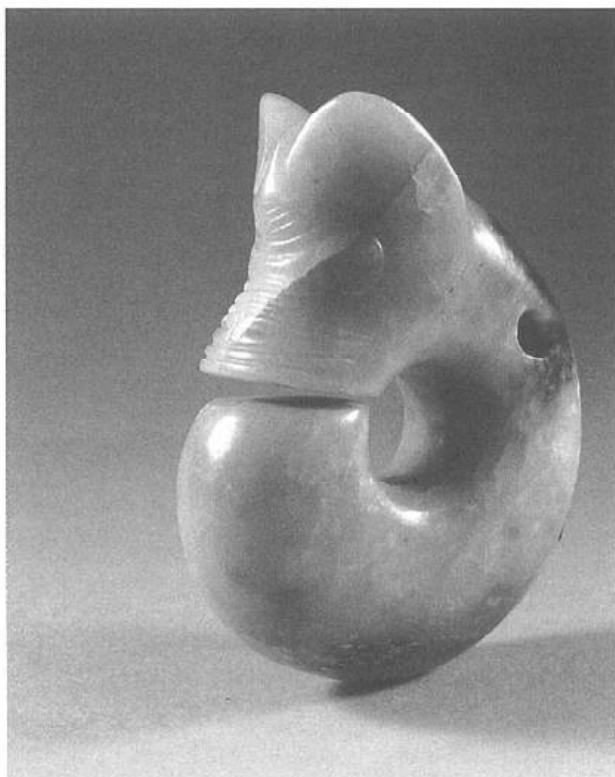


写真2. 玉龍（牛河梁第2地点1号塚4号墓出土。高さ10.3cm）

している。3. 紅山文化は、細石器文化と仰韶文化から相互に影響を受けたのち発生した新しい文化の可能性があり、細石器文化と仰韶文化の両方の要素を含んでいる。あるいは細石器文化と仰韶文化の接触後に生まれた典型的な混合文化の一種である。4. 紅山文化は、この地区独特の特色を持つ新石器文化の一種であり、独自の発生・発展過程がある。また、その発展過程では、他の文化の影響を受けていた⁽²⁾。

さらに、紅山文化の基本的特徴は以下の4点に要約することができる。

1. 石器の使用量が多い。各遺跡からは土器よりも石器が多く発見され、磨製および打製石器が細石器と共存する。かつ大型石器や打製と磨製の技術もまた重要である。細石器では凹底型の底部二等辺三角形の石鏃にもっとも特色がある。研究者はまた、紅山文化の大型石器を主とする石器群の多くが農業生産に関係していることや、伐採器や耜などの道具が多く、耕地に手を加える道具——鏟類が少ないことを発見した。このことは耕作面積が広く、また粗放であった可能性を示す。細石器と局部打製石器は肉や皮をカッティングすることと関係しており、牧畜が重要な地位を占めていたことを示している。こうした状況は、紅山文化が農業と牧業との結合を主とした定住生活社会であったことを物語ってい



写真3. 「紅山文化」の名称の起こりとなった紅山の景観（赤峰市、紅山の山中に多くの遺跡が残されている。）

る。

2. 主な土器には泥質の紅陶と砂混じりの灰陶（粗製土器）とがある。砂混じりの灰陶は、「之字文」を施した深鉢形の甕が主となる。

3. 玉器は大型の玉を主としており、多くは埋葬品として、石棺墓から出土している。器形の多くは動物の形をしており、組み合わせて使用され、原始的な玉制度が出現していたことを示している。

4. 住居跡はすべて正方形で竪穴式、中に炉跡を有する。

紅山文化の墓葬は最近の研究によると2種類に分けられる。1つは積石塚の石棺墓が圧倒的に多く、もう1つは小型の石棺墓と土坑竪穴墓があり、前期と後期の区分が明確に現れていることである。前期は合葬墓が多く、埋葬品の多くは石器や土器で、玉器は見られない。こうした墓は少数に属する。後期の墓は山陵のような迫力がある。その大きな墓の下方には順序良く大小異なる形の石棺墓が並んでいて、それらには“玉だけが葬られ”その他の副葬品はみられないか、あっても僅かである。

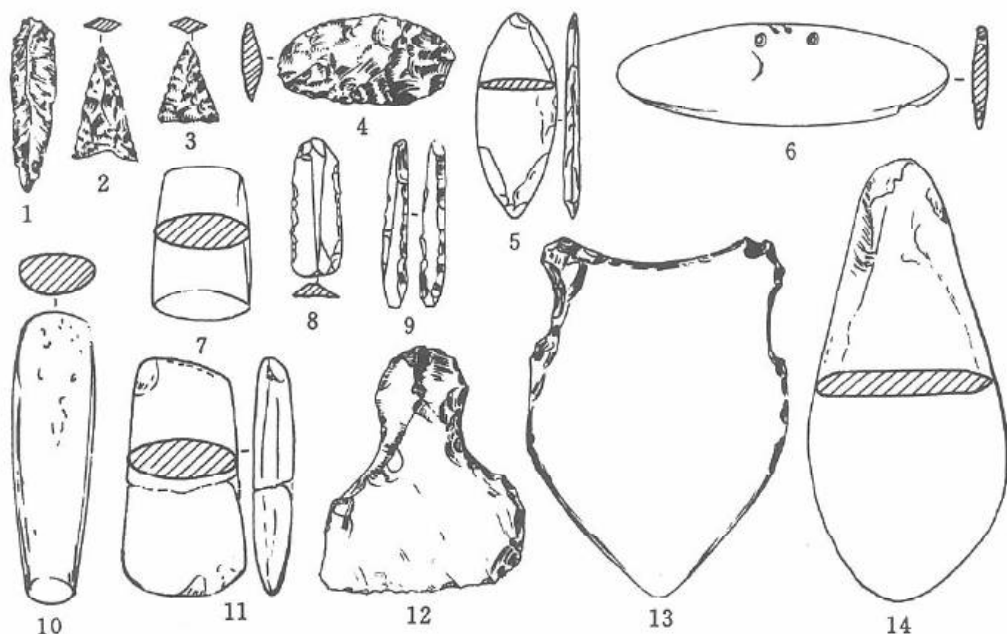


図1. 紅山文化の石器（1. 錐, 2・3石鏃, 4. スクレイバー, 5. 葉形石器, 6. 石刀, 7・11石斧, 8・9石刃, 10鑿, 12有肩石鏹, 13・14耜

3. 紅山文化と玉器

紅山文化の玉器は、解放前（1949年以前）にも多くの数が出土しているが、残念なことにほとんどが海外に流出した。1970年代初めに、内蒙古の翁牛特旗三星他拉から玉龍

が出土し、学界の注目を集めた。その2年後には遼寧省阜新胡頭溝からも紅山文化玉器の発見があった。

特に1970年代以来、遼寧凌源三官甸子村の城子山石棺墓から出土した馬蹄形の玉箍と、勾雲形玉佩に代表される一連の玉器は、遼寧省の考古学者やその他の学者たちをして、器形の比較と出土状態を合わせることで、これらの時代が商代や周代、夏代でもなく、さらに早い紅山文化に属すると大胆に推論させた。そのときの研究成果は1981年に杭州で開かれた中国考古学界の第三回年次大会で公表され、1984年8期の『文物』誌に発表された⁽³⁾。

ここに来て、紅山文化の文明要素は大きく注目されることとなったのである。紅山文化の玉器が確認されて以降、人々は玉龍の起源についての考証を深め、また、その工芸技術に対する分析を行った。

1990年代初めの紅山玉器の大量出土により、紅山玉器に関する研究は考証および比較から、器の種類に関する具体的な研究へと転換した。これらの研究の多くは、ある器種に関する形態構造という角度から始まり、当該玉器の製作意図や反映されている思想や寓意、玉器の使用法や用途を検討するものであった。

1990年代中頃、紅山文化の玉器研究は更なる発展を迎えた。玉器の類型と用途に関する総合研究や考証だけでなく、紅山文化の玉器の特徴や彫刻の芸術的風格、トーテム崇拜に関する研究も始まり、玉器と中華文明の起源との関係についての探索が行われた⁽⁴⁾。

紅山文化の玉器が確認されて以降、そして新石器時代の考古研究が発展するにつれて、紅山文化の分布地帯の中華文明の起源における地位は日増しに向上した。

1970年代から80年代にかけて、著名な考古学者、蘇秉琦教授が1960年代の模索と理解を経て、中国考古学文化の区系と類型に関する学説を発表した。「区」とはかたまり、「系」とは筋、「類型」とは枝分かれで、中国に960万km²の土地が広がり56の民族がいるといった事実に基づき、現在、人口が密集している地区の考古学文化もまた、6つの大系に区分できるとした。

これによると、紅山文化は六大分布の1つ、燕山南北の長城地帯を中心とする北方に分布する⁽⁵⁾。考古学者は中国文明の起源における紅山文化の地位を確実に引き上げ、新石器時代における紅山文化の重要な地位と役割について、その後の考古学的発見によって更なる実証を進めた。蘇秉琦教授はある考古学研究会で、文化と歴史の発展の連続性から、燕山南北の長城地帯を中心とする北方地区がわが国の文明史上において特殊な地位と機能を持つと高く評価した⁽⁶⁾。

蘇秉琦教授は、わが国が統一した多民族国家を形成した一連の問題がもっともこの点に集中して反映されていると考え、秦以前も同様であるだけでなく、それ以降も、「五胡乱華」（匈奴、鮮卑、羯、氐、羌が中華を乱すこと）から遼・金・元・明・清の時代まで多

くの困難な歴史的出来事がこの地で繰り広げられたとしている¹⁷⁾。この要衝の地は、ちょうど紅山文化の発祥地と重なり、また、6500年前から5000年前に紅山文化の先住民が生活し、次第に数を増やしていった地域でもある。

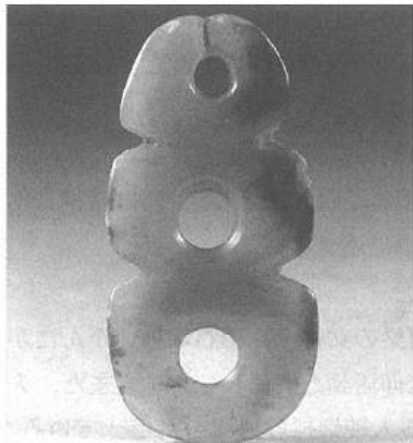


写真4. 三連玉璧（遼寧省阜新県胡頭溝墓地3号墓出土。高さ6.4cm）

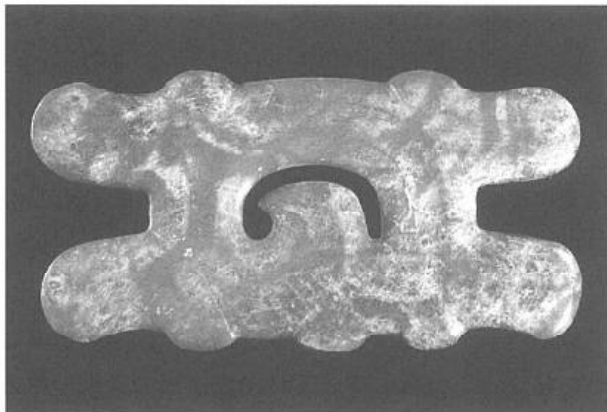


写真5. 勾雲形玉佩（牛河梁第16地点2号墓出土。長さ22.5cm）

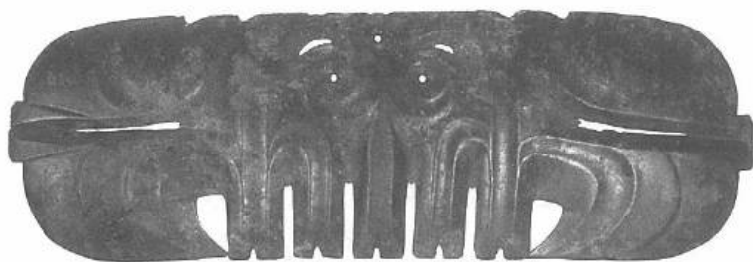


写真6. 双勾形勾雲形大玉佩（牛河梁第2地点1号塚27号墓出土。長さ28.6cm）

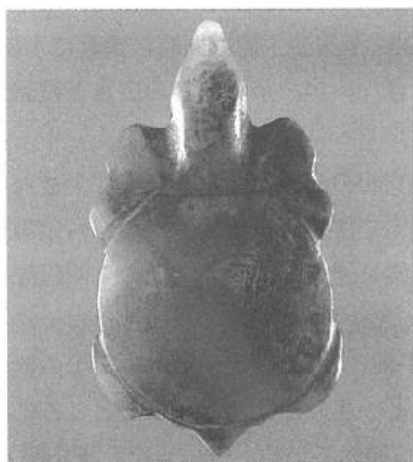


写真7. 玉亀（遼寧省阜新県胡頭溝墓地1号墓出土。高さ4.8cm）



写真8. 玉龍（遼寧省建平県採集。高さ15cm）

4. 積石塚・祭壇・廟の出現

紅山文化後期に出現した敖漢四家子草帽山の積石塚、略左東山嘴の祭壇と牛河梁の女神廟、積石塚といった巨大な「ピラミッド式」建築は、紅山文化と中国文明の起源をめぐる話題にさらに新しい内容を付け加えた。そして紅山文化は、中華文明の起源と密接に関係する中国北方地域の重要文化であると意義づけられるところとなった。

敖漢四家子草帽山の積石塚、略左東山嘴の祭壇と牛河梁の女神廟・積石塚は新石器時代の文化現象であり、次の2つの面から中国文明の起源に迫ることができる。1つは精神文化であり、もう1つは物質文化である。ここでは分けて簡単に述べる。

(1) 精神文化

敖漢四家子草帽山の積石塚、略左東山嘴の祭壇と牛河梁の女神廟、積石塚のいかにかわらず、これらはすべて紅山先住民の初期の原始的信仰活動と関係している。また、人類の原始崇拜は自然崇拜、祖先崇拜、トーテム崇拜から人神崇拜の過程をたどっている。紅山文化の壇・廟・塚の深遠な趣きは、紅山文化の塚から出土した玉器や東山嘴の祭壇から出土した玉璜に表れている。また、牛河梁の積石塚石棺墓から出土した紅山文化後期の原始崇拜遺物は、すでに原始宗教段階へと発展していることを示す。さらに敖漢四家子草帽山積石塚の玉器の組み合わせは、この時すでに祭祀活動を専属的に行っていた人物が存在したことを表わしており、すでに一つの社会階層が成立していたことを示している。

こうした人々は生前、各種の祭祀活動に専属して従事する中で、心の中に「人神」を認めるようになった。彼らは神に通じる玉器を手にし、さながら人と神の間に通じる使者、あるいは神の化身そのものとなった。彼らは死後、祭祀を行う聖地に埋葬され、生きていた人々に祭り続けられた。

牛河梁女神廟もまた、別の側面から紅山文化後期の祭祀活動がすでに相当大きな規模で行われていたことを示している。大小の女神と鳥神、玉猪や玉龍は同時に殿堂に奉納され、これらの間の内在的関係の有無については証明できないが、祭祀内容の広さと複雑さが連想できる。

これら有史以前の大規模祭祀遺跡の発見は、中国文明の起源に関する研究に大きな影響を与えている。ある学者は「遼西古代文化の研究はすでに新しい領域、すなわち宗教意識形態の領域に及んでいる。そして、主に宗教意識形態を通じて、この地区の文明起源を探索している」と説いている。

王大有氏はさらに、「中国の禪（古代祭祀用の平地）、壇、円丘、廟は事実上の政権と国家の象徴である。こうした大型の壇、円丘、廟など一連の建築が存在したところには、すでにどこにでも必ず国家が存在していた」⁽⁸⁾とすら述べている。彼はまた、東山嘴と牛河梁の壇、廟、塚の範囲が約50km²であることを明確に指摘している。その広々とした様子は

この場所が確かに国家の封禪の地であり、これらの建築は有機的に整えられた祭壇、方壇
円丘（台）である。まさに心安らかに壇に向い、方壇に石を立て、祖霊に祈る。土製の人
型塑像の組み合わせは、それらが天、地、人を祭る大型祭祀の中心であることを説いてい
る。周囲に居住跡が見られない山の上は、盛大かつ壮重な、国家の大がかりな封禪の地で
あったことがわかる⁽⁹⁾。



写真9. 牛河梁第13地点の全景

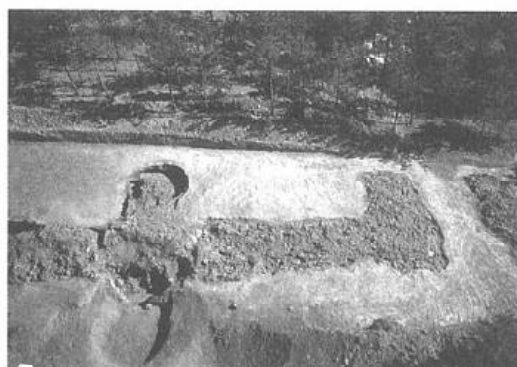


写真10. 牛河梁女神廟の全景

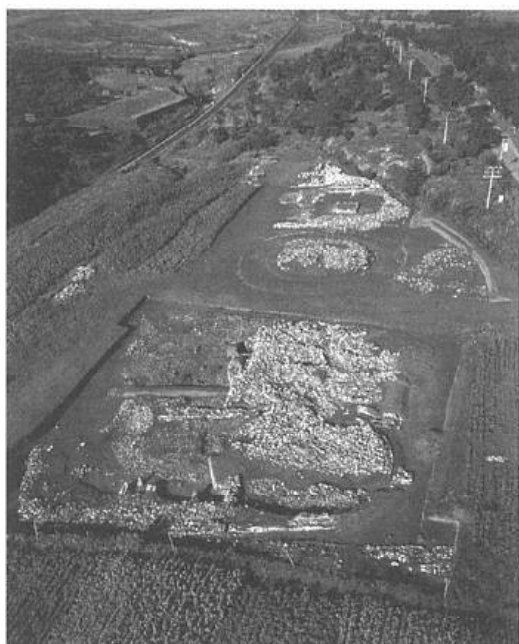


写真11. 牛河梁第2地点の発掘全景（東から西）



写真12. 牛河梁第2地点4号塚の全景

(2) 物質文化

東山嘴祭壇と牛河梁紅山文化の壇、廟、塚と轉山子の巨大「ピラミッド式」建築、巨大規模をなすこれらは有史以前に存在した公共性を持つ大型祭祀遺跡群であり、物質文化の

面でも早期の文明社会の建築段階に近づいていたといえる。

ここで私たちは、東山嘴と牛河梁積石塚墓葬群がいかに多くの石を用いたか、また多くの巨大な石を費やしたかについて述べるのではなく、牛河梁轉山子のピラミッド式巨大遺構で必要とされた人員のデータを基にして、当時の紅山文化の生産レベルと管理体制を分析し、それによって当時の社会形態と文化進歩の程度を論じたいのである。

ある学者の研究によれば、このピラミッド式巨大建築の地上部分の中心は、地固めした丘からなり高さは約25m、直径は40m近くあり、外側は巨大な石で包まれているとされている。建築の全体範囲は1万㎡近くあり、地固めした土の部分だけでも10万㎡以上ある。その中でも、遠くから運ばれてきた巨大な石の工事には、少なくとも数10万人の労働者が必要とされている。個別の氏族や集落の単位を越えた上位の社会組織や何らかの文化共同体がなかったとすれば、こうした巨大工事は組織的に計画できなかったし、ましてや完成などしなかったであろう。もし、ある組織や文化共同体が機能していたとすれば、(こうした組織、協調された指揮機能を持つ文化共同体があったとすれば)事実上、国家的な職能が作用していたと言えるのである。

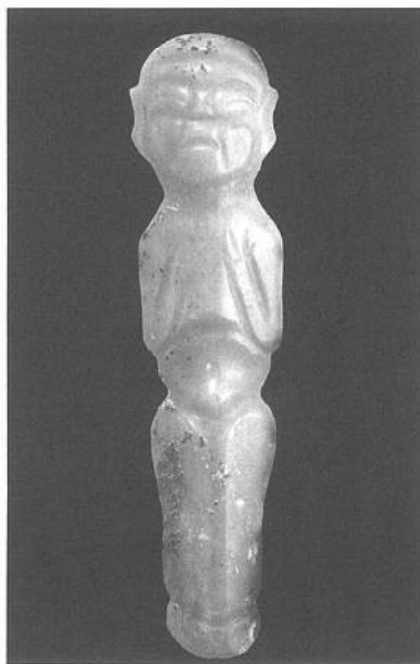


写真13. 玉人(牛河梁第16地点4号墓出土。
高さ18.6cm)



写真14. 牛河梁第2地点1号塚21号墓の石棺墓。

このような面から説明すれば、文明の曙はすでにこの地に現れていたのである。1970年代末と80年代初頭の喀左東山嘴祭壇と牛河梁女神廟、積石塚の発見、1990年代の赤峰

敖漢四家子草帽山でさらに発見された祭祀機能を基礎とする紅山文化の積石塚は、疑いもなく紅山文化の内容に新しい血と活力を注入し、考古学や歴史学界での文明起源に関する話題を活発化させ内容を豊かにした。そこから、中国北方の長城地帯と中華文明の曙の関係は緊密に論じられるところとなった。さらに、ここは中原の黄河文明と同列で語られる遼河文明の発祥地とされ、これによって紅山文化の研究はさらに高い出発点へと進み、紅山文化の「文明」熱は一気に高まったのである。

5. 「文明時代の曙」を示す紅山文化

次に、紅山文化の壇、廟、塚の発掘者として議論を飛ばしたい。私は、上層建築の範疇にある等級関係を示す宗教祭祀や文化芸術は、必ずや社会の生産能力と呼応していると考えている。もし、長期間の相対的な安定と繁栄した社会環境がなければ、壇、廟、塚などこうした偉大かつ巨大な遺構の構築は不可能であったと考える。すでに発掘された積石塚の中心にある大きな塚墓は、規則的に石が築かれ、一人用の墓の埋葬品としてはとりわけ美しい物が多い。これに反し、二次埋葬墓は粗末で、埋葬品も少ないか、あるいは無く、墓の主人間に身分等級の明確な区別がある。

このことから、牛河梁の廟や塚は紅山文化の社会構成をあるがまま写したにとどまらず、当時の社会の縮刷だったといえるほか、この時期の先住民族は階級社会へ歩み出していたと考えられる⁽¹⁰⁾。

多くの学者は、中国には5000年の文明史があり、四大文明の古い歴史を持つ国の1つであると考えてきた。それにも関わらず長い間、5000年の文明史にふさわしい起源を実証するものを見つけられずにいた。とりわけ、エジプトのピラミッドやメソポタミア文明のウル神廟、インド河流域のモヘンジョダロ遺跡のような、文明を“象徴”するものが欠けていた。

近年の中国各地での先史考古学の重大な発見は、5000年前から4000年前の文明起源の遺跡に関わるもので、“象徴”を含む実証や若干の希望的な手がかりを提供した。牛河梁の壇、廟、塚の遺跡群の年代は今から約5000年前で、中国文明と文化伝統の起源において突出した地位を占める。よって、その中でもここは最も代表的な場所なのである⁽¹¹⁾。

『発掘簡報』の中で、牛河梁の壇、廟、塚と中華文明の起源との関係について直接的な分析と判断が行われたが、著名な考古学者、蘇秉琦教授も東山嘴と牛河梁での考古成果を高く評価し、これら考古遺跡の発見が「わが国が早くも5000年前にすでにコミュン（公社）を根付かせ、また、コミュンをしのぐ一段高い社会階級形式があったことを説明している」と述べている。

わが国の他の地方では、まだこれに相応する時期の類似した遺跡群は発見されていないが、これらの発見は中華文明の起源を1000年も繰り上げた。また、ある学者は紅山文化

の原始的信仰を分析した上で、東山嘴祭壇の前円後方・左右対称の作りが以後の中国の壇、廟、塚の有機的統一体の大型建築群の嚆矢となったとした。ここに原始宗教が繁栄、発達した現象が見られる一方、当時の社会組織が激烈に変化していたこともうかがわせている。血縁関係によって結ばれた当時の氏族社会が解体し、社会勢力が次第に神権と政権を握る1人の特権者の手中に集中し、1つの中央集権機構——国家が現れ、あるいは現れようとする、それは正に「文明」の到来であった⁽¹²⁾。また、ある学者は、壇、廟、塚の礼制建築が持つ社会的機能が、神によって福を招く巫術活動の重要な場所であり、神権統治の中心的場所であると同時に、政治、経済、文化の中心であるとして、紅山文化の社会はすでに文明時代に突入していた可能性が高いとした⁽¹³⁾。さらに、別の学者は古い文献資料を結び合わせて、遼西紅山文化の社会はまさに重大な変革時期にあり、階級社会へと足を踏み出していたとした。その歴史時期は、顛頊（神話上の王の名）の頃と符合するとした⁽¹⁴⁾。

伝統的な理論では、文明の出現は3つの要素を同時に持たなければならないとしている。即ち、文字、都市、青銅器である。この説明にしたがえば、後期の紅山文化社会はまだ文明段階に入っていない。これは理解できる。しかし、紅山文化の成熟した玉器の組み合わせや玉器文化群には原始時代の玉礼制の糸口が現れ始め、紅山文化の壇、廟、塚は強大な社会機能と厳密に順序立てられた管理秩序とレベルを反映しており、紅山文化がすでに文明時代へ近づきつつあることを我々に信じさせるものがある。実際、神権と族権が互いに結合した紅山文化後期の社会が示すのは、文明時代の一般的な特徴であり、人々に文明の曙を告げるものであった。紅山文化が展開した大地の文明の光は、まさにその独特の方式によって太古の西遼河流域に現れたのである。

(翻訳：藤田園子)

註

- (1) 蘇秉琦『華人・龍的傳人・中国人—考古尋根記』遼寧大学出版社、1994年、88頁。
- (2) 徐光冀「紅山文化的新発見」『新中国的考古発見和研究』文物出版社、1984年、175頁。
- (3) 孫守道、郭大順「論遼河流域の原始文明与龍的起源」『文物』1984年第8期。
- (4) 呂軍「紅山文化的玉器研究」『青果集』知識出版社、1998年、44頁。
- (5) 蘇秉琦『中国文明的起源』三聯書店、1999年、34～35頁。
- (6) 遼寧省文物考古研究所『牛河梁紅山文化遺址与玉器精粹』文物出版社、1997年、15頁。
- (7) 蘇秉琦「淺談東山嘴」『考古』1984年第6期。
- (8) 王大有『上古中華文明』中国社会出版社、2001年、214～215頁。
- (9) 註8に同じ。
- (10) 遼寧省文物考古研究所「遼寧牛河梁紅山文化“女神廟”与積石墓群発掘簡報」『文物』1986年第8期。
- (11) 遼寧省文物考古研究所『牛河梁紅山文化遺址与玉器精粹』文物出版社、1997年、39頁。
- (12) 蘇秉琦『華人・龍的傳人・中国人—考古尋根記』遼寧大学出版社、2000年、81頁。

- (13) 吳汝祚「論老哈河、大梁河地区的文明起源」『北方文物』、1995年第1期。
(14) 張博泉「論遼西發見五千年前文明曙光的歷史蠡測」『遼海文物學刊』1987年第2期。

【写真・挿図出典】

写真1=2005年9月筆者撮影（巴林橋附近にて）

写真3=郭大順『紅山文化』文物出版社、2005年

写真2・4・7・8・10、図1=遼寧省文物考古研究所『牛河梁紅山文化遺址与玉器精粹』文物出版社、
1997年

写真5・6・9・11・12・13・14=遼寧省文物考古研究所『牛河梁遺址』学苑出版社、2004年

